

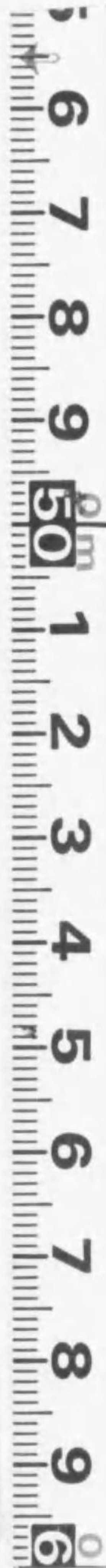
特264

982

夜の茶壺

著雪鼓野増

始



特 264
982

夜の茶番

著雪鼓野増



はしがき

番茶の夜は大正十五年の三月から、同年十二月迄に、道の友に連載したものである。執筆の時日を明記して置かなかつたので、文中月日の不明なのがある。改めようかと思つたが、それでは書いた時の気分が、失はれる様な氣もしたので其の儘にして置いた。甚だ不實な譯だが、悪しからず寛容を願ふて置く。

番茶の夜目次

序の言	一
年祭を済まして	三
本教と議會	六
青年會の講習會	八
支廳の増設	一〇
死者の靈	二
一日の日	二五
簡単な禮狀	二七
埋葬の間	二九

假神殿の倒壊	二
事務の統一	二四
大きい脱字	二六
眞實の世渡り	二八
青年の思想化	三〇
小さんの話	三二
宗法の研究会	三四
解散の購買組合	三七
教理の開拓	三九
教規及規程の訂正	四一
御話の狙ひ所	四四

中學校の増設	四六
谷本博士の本誌評	四九
吐血の瞬間	五一
絶版に際して	五三
青年の登用	五五
大きい夢	五八
偶像の苦味	六〇
謎の箱	六三
賢明なる讀者	六五
更らに困苦を	六七
現實を超へて	七〇

忘れること	七二
天地と身體	七五
信仰の社會化	七七
權道の價值	七九
二つの中心	八一
枝先教會の完備	八四
闇黒の道へ	八六
乘馬と揮毫	八九
言葉と文字	九一
秋の夜	九三
誤れる因縁の自覺	九五

教會の復興	九八
一枚の端書	一〇〇
一つの岐路	一〇二
陽氣と瞑想	一〇五
神靈中心	一〇七
遊撃の要	一〇九
信徒に親しめ	一一一
本誌のやぶにらみ	一一三
眠れる力	一二六
外國の小説を讀め	一二八
教校生の信仰	一三〇

法城を護る人々……………	二三
二つの流れ……………	三五
歳末……………	三七
最後の願……………	三九

番茶の夜

増野鼓雪

序の言

玉露を舌の上ののせて、靜かに味ふ程落付いた柄でもなし、苦い引茶の泡を見つめて、茶碗をひねくりながら四角になつて飲むほど、老ほれた譯でも尙更らない。番茶も出花の匂を讃して、がぶ飲みの談論風發とまではゆかなくとも飲み過ぎた酒の様に身體に害の無い所で、番茶の意氣な味覺をそゝりながら、

暇ある夜毎に徒然草の文句ではないが、そこはかたなく書いてみようと思ふのである。

隨筆と云ふべきか、感想と名づくべきか、短評とするのが適當か、今の所見當さへも付かない。暗黒から總てのものが生れる様に、頭の中の暗黒中に、有象無象や魑魅魍魎の類が、横行闊歩してゐる有様であるから、筆を通じて結構な光明世界へ現れた時、どんな姿となつて生るゝやら、生みの親でも分らう筈がない。此の世のことでも其通り、男は無数の女を見、女は無数の男を見てゐるが、さて縁あつて妻とし夫とするのは、一人より外にはないのである。縁のつながる其日まで、どれが妻となり夫となるべきやら、御當人も一向に御存知がないのである。

如何なるものを觀て、如何なるものを書き出すやら、頭の中から化物が飛び出すか、端麗美妙の女神が出現するか、それは凡て神秘の幕で閉された、今では見るに見られぬ他界のものとして、一杯番茶を飲みながら、そろくくと本舞臺にかゝるとしよう。

年祭を済まして

教校で數千の生徒を相手にして、八時間の喋べり續けの立往生をして居た頃は、何がさて四十年祭が、見上げる峠の様に眼前に横たはつて居たので、靜かに自己を内省してみる餘裕もなく、それからそれへと押し寄せて來る仕事の爲めに、瘦馬のやうに追ひ立てられてゐたので、先づ一と安心と思ふ間もなく、年祭の直接準備に着手せられたので、又もや眼の廻るくらいの忙がしさに慌

しい日を送つてしまつたから、我が身が人の物やら、我が心が何處にあるやら考へてみる間も無い程だつた。

年祭を済まして、一と月半も過ぎた今日、左程に差し迫つた要件も無い身となつて、一人静かな居間に落付いた時、始めて失はれていた自分を、此所にあつたと見出したやうな氣がする。何か忘れものをしたか、落し物をした折に感ずるやうな、物足らぬさびしい思ひが、何をすることも纏ふてゐる様であつたのが、心の奥から力強い歩みで、懐かしい自己の姿が現はれた時、何とも云ひやうのない嬉しさを感じたのである。

自己を忘れて、教の爲めに働こうと、多くの人々と其の歩みを同じうすることは、至極尊いものであることは、全く知らぬ譯ではないが、近代思想に多少とも影響を受けてゐる者は、自我を没却することに於いて、必ず寂し味を感じ

るに相違ない。飽く迄も自我に立脚して、一段と人格を向上せしめたいと冀ふるに醒めたる心には、恐らく全き自己放棄は出来ない。其所に若き人々の苦悶があるのではなからうか。

然し私は自我を徹底して行つたならば、遂には没我の世界に入るべきものだと確く信じてゐるのである。年祭が済んで自我を凝つと見つめる暇が、少しでも出て来たのは、私には何よりの歡びである。心の根を張るべき旬に、此の心の道を見出さしめ、其の瞬間を與へられたのは、全く神が私に恵まれた、至大の恩寵として感謝する。

本教と議會

梅の花が咲きそめた。大和の三月はもう寒さが薄らいで、ゆつたりした気分が、見渡す野山にみちて居る。書齋の窓に差し込む日の光に、若々しい氣持になつて、卓に散亂してゐる新聞紙を、何氣なく取りあけて見ると、混亂した議會の報道が、大きい見出しで掲げられてある。

今年の二月十六日に在京してゐたのを幸ひ、松村先生が上京せられたので、議會見物にお誘ひした。其の日の議場の有様が直ぐ心に浮んで來た。國家の選良たる人々が、口穢なく罵聲を交へる態度が、あまりに露骨なのに驚かされたが、然し之れは制度の罪でなくして議員の誤りである。若し眞面目な誠實な心

からは是の制度を利用したならば、必らず正しい政治が行はれるであらう。

本教も教廳が置かれてから、多少政治化して來たが、昨年職制が制定されてからは、殊に政治的な色彩が濃厚になつて來た。教會系統以外に、本教全體を總括する此の機關は、やがて議會政治の要求を將來するものでなければならぬ。其の階段を本教は今一歩づつ登つてゐる様にも見受けられる。

神言に國會では治まらんと云ふ御言葉がある。神一條の道から云へば、全く其の結論に到達する。けれども凡てが神の信徒であるべきものに、本教發達の過程として教會組織を許された如く、同じ意味に於いて即ち假輪として議會に等しいものが、許される時のあるのを私は豫想するものである。其理由に至つては又別に私しは述ぶる機會があらふと思ふ。

青年會の講習會

四十年祭が済むと同時に、本教の人々の心に、今更らの如く湧いて來たのは年祭の懸聲で、異常に緊張した教會や教師の跡始末を、如何したら宜からうかと云ふことである。無論年祭の前にも、斯うした考へは既に現れかけてゐたので、十三年度の大講習會にも、内容の充實が力説せられてゐた。然し其の當時は、何を捨て置いても四十年祭の爲めにと、力身返つてゐた時であるから、深く顧みる者も無かつたのである。

所が年祭が済んで、さて何んとかせなければならぬとなつてみると、何れの教會も行き詰つて、教師や教徒の精神も、無活氣の状態に陥つてゐる。是れで

はならぬ、何んとか信徒一般の心を引立て、先づ教會を盛んにせなければならぬ。それには内容を充實せしめるより他には無いと云ふので、助け一條とか内容の充實とかが叫ばれる様になつた。

然し内容の充實と云つた所で、其の内容を如何にして充實せしめるか。現在の如く唯徒らに聲のみ高くして、何等具體化されていなるのでは、何んの効果もあり得よう筈がない。斯うした方針で斯うした方法に依つて、斯う努力せよと、明瞭に指示してやる必要が、確かにある様に思はれる。

青年會が各地に於いて、管長の論達に基き、講習會を開催するのは、洵に時機に適した處置として、私しは心から賛同するものである。然し唯冀ふ所は單なる内容充實の叫びに終らないで、多少とも事實化するだけの、精神力の注入であつてほしいと共に、内容充實に人々の心を轉向せしむる、一つの大き

い動機として貰ひたいのである。

支廳の増設

現在本教には朝鮮や滿洲を別として、拾四の教務支廳が設けられてある。支廳設立の目的や理由に付ては、今更ら説くべき必要はないが、其の目的なり理由なりが、現在充分行はれてゐるか如何かと云へば、私は甚だ物足らなさを感ずるのである。

膝を直して云ふ迄もなく、近畿地方の支廳は、未だ割合に左様した不便を感じないが、東北や九州地方では、支廳の数が少ないので、非常な不便を忍んでゐる。教會側の人々から云つても、支廳の側から云つても、不便と不經濟は同

じである。そして其の不便と不經濟が何んの役にも立つていない有様である。

内容の充實が本教の重大方針とせられてゐる今の時に、斯うした方面に無駄な努力を拂はれてゐることは、何んと云つても感心出来ない。又内容の充實を促すべき立場にある支廳としても、其管内があまりに廣過ぎるので、徹底して其の方針を教示することも出来ない。殊に十四ヶ所の支廳は、今より殆ど二十年前に設けられたので、其の後本教は三倍にも四倍にもなつてゐるのであるから。従前の儘では充分だとは云へさうな筈がない。又府縣別の區分けから云つても交通機關の不便であつた二十年前と今日と、同じ様に取扱ふのは殆んど盲目に等しいものである。

内容充實を實際化して行く一つの方法として、右の様な理由から、私は此

の機會に支廳管下の府縣別を整理すると共に、出來得るだけ支廳を増設して、充分教會教師を監督し指導し、本教の全面に活氣の横溢するやう、取計らはれたいと思ふのである。

死者の靈

本月の初旬、春野の孫が福島で逝去し、本葬をお地場で行ふたので、私しも其の葬儀に列して、豊田山の墓地へ行つた。墓地で別に新しく異つたことがあつた譯ではないが、先年山を切り取つて擴張した新墓地が、六七分も既に墓碑が林立してゐる。それを見て私は、四十年祭には墓地も非常な發展をしたものだ、少なからず驚かされた。

同時に私は斯うしたことを思ひ出した。此の墓地に埋められてゐるのは、無論信者の人々もあらうが、大多数は教校生であつて、然かもそれは私が教校で奉職中に死んだ人々である。いつであつたか教校生の死者に對して、慰靈祭を行ふと云ひ出してゐるのに、多忙の爲めに遂ひ其の志望を果さず職を止めてしまつたのであるが、未だに此の事は遺憾に思つてゐる。

斯う云ふと途方もない所へ當るやうだが、一體本教は死者に對して甚だ冷淡である様に思ふ。無論本教は教祖に依つて立教せられたのであるが、現在の本教を形造つたのは、斷じて教祖一人の力ではない。教祖の教化に浴し其の精神を受繼いで、尊き一生を本教に捧げた、多くの人々に依つて形造られたのである。然かも死ねば死損として何等顧みられないと云ふのは、甚だ面白くない傾向である。

五月に行はるゝ本席の二十年祭に付ても、未だ何等の準備があつたとも聞かぬ、又四十年祭に際しても、一般信徒の人々にまで御酒料を下附されてゐるのに本教の功勞者である、多くの死者に對しては、全く見捨てられてゐる有様である。

本教は現世教だからこれで宜いと云へばそれ迄、眞に本教の爲めに靈的自覺を得て、身も財も捧げて働こうと云ふ人々を、これで造り得られるであらうか。死者も靈に依つて生きてゐる。願はくば今少し死者に對して、慰靈の道を講じて頂きたい。

一日の日

朝眼が醒めると悪い癖で、寢床の中で煙草を飲むのであるが、左様定めたと云ふ譯ではないが、其の間に其の日せなければならぬ用事を、大體頭の中で定めてしもうのが、何時とはなしに習慣になつてしまつた。其の考へがちやんと纏まると、自分の性分としてもう寢てゐることが出来ない、寢床から飛んで出るのである。

朝食を済ませて、さて仕事にかゝる段になるのだが、其の仕事が自分一人で出来ることなら、大低計畫した通りに進めて行くのであるが、時には頭や身體の工合が悪るかつたり、突然人が訪問して來たりなどして、思ふ通りに遣れな

い場合もあれば、又た他人との交渉事になると、尋ねて行つた人が留守だつたり、人に頼んで置いたことが豫定通りに出来ていなかつたりして、折角立てた計畫もめちやく／＼になつて、一日無駄に送つてしもう日もある。

其の反對に又た、今日別段用事が無いと思つてゐるのに、思はぬ人に出合つたり、思はぬことを書いたりして、二日分三日分の仕事を、何んの苦もなくすらく／＼運べて氣持のいい日もある。

斯様に僅か一日の日でさへ、自分の思ふことが思ふ通りにならないのだから五十年六十年と云ふ長い一生が、人間の思ふ通りになりそうな筈がない。理想だ、目的だ、主義だ、主張だと云つても、一寸人間が一生懸命になる爲め、又ならず爲めの方便に過ぎないので、其所に大きい間違が潜んでゐるのだ。お互ひに大きい自然の懷に、唯神様のみを信じて、波にゆられる小舟の様に、漂ふ

儘に卒直になつて、一日又一日と人生の流れを下るより他はない。

簡単な禮狀

四月上旬の一日、其の日は午後から生暖かい風が、心を暖ますやうに吹いていた。夕方になつてから風は治まつたが、重苦しい暖かさは其の儘であつた。九時過ぎ三輪の大教會から歸つて来た私は、習慣通りに火鉢の前に座つて、留守中に来た郵便を手に取り上げた。其の手紙の中に久しく私しの所へ通ふて来る、或る若い所長からの封書があつた。開封して読み流してみた所、別に深い意味のあるのではなく、先日多忙の處を御邪魔をして、有難かつたと云ふ單なる禮狀に過ぎない。

事實を云へば斯うした手紙は澤山來るのであるから、今までは少しも心に留めなかつた。所が其の晩に限つて私はふと斯んなことを考へた。今日まで四十年祭に熱中していたので、又實際忙しくもあつたので、用事以外の手紙は、殆んど讀まなかつた。甚だしきは病氣の御論などを尋ねて來るのは、細かい分り悪い文字で、十枚も十五枚も書いてあるので、根氣よく讀む氣さへ起らなかつた。それで大抵は返事も出さずに、打捨て、置いたのである。

是れは要するに、眼に見えた大きい仕事に、心を奪はれてゐたからである。けれども靜かに考へてみると、簡單なる手紙や、一句の言葉にも、其の人の心を味ふて行つたならば、底の知れぬ程深い意味がある。又其所に眞に人を助けさして貰へる、眞實の道があるのである。

斯う思ひ到つた時、私は長らく脱線してゐたのに氣が付いた。そして人々

の心を理解せずに通つて來たのを悔いると共に、知人の心の奥をそれこれ心に浮べてみた時、理の働きを認め得られるやうな、たのしみを見出したのである

埋葬の間

最近或る知人が逝去したので、其葬儀に列して墓地へ行つた。墓地の齋場で埋葬の式が、いと嚴かに行はれたのである。其の式中に私は斯んな氣がした斯うした式を行つて貰つて、死者は本當に満足してゐるのだらうか。或は満足してゐるかも知れない。然し自分があの棺の中に居るとしたら如何だらうか。私は全く寂しい氣持にならざるを得なかつた。

自分が心から尊敬してゐる人が、神の様に叱り付けて呉れるか、自分の心を

眞に理解してゐる人が、心から慰めて呉れるのならば思ひ残す所なく死んで行けそうに思へる。所が生前話し合つたこともなければ、交際さへしたこともない人や、甚だしきは互に暗闘していた様な人に依つて、悲しいとか惜しいとか云はれてみた所で、心に感じそうな筈がない。況んや義理か役かで参列している人々に取りまかれてゐるに於ておや。

けれども斯んな考へは、頭施の曲つた者の思ひ付きであつて、是れが此の世の儀式だと思ふて、何んの不満も不安もなく、多くの人々は神の世界へ歸つて行くのである。私しは其の人々の幸福を決して害したいとは思はぬ。けれ共これから先の世の中の人々は、それで満足が出来るであらうか。

御教祖が舊來の儀式を捨て、人の心を淨化する御神樂をもつて、新たに儀式を創造せられたのは、實に深い意義の存する所である。出来ないかも知れな

い、然し出来るならば死後に於ても、親しい人々に依つて、死後の私しの心を靈化する爲めに、神樂勤めを行つて貰ひたい。左様したら私しの心は満足し得られる様に思ふ。多分道の人なら、私しと同じ思ひを抱かれるであらう。

假神殿の倒壊

四月の四日に東京教務支廳の記念祭が、例年執行されることになつてゐるの
で、其の前の晩に私しは三島をたつて、夜汽車で上京することになつた。丁度
旅行のシーズンではあり、土曜と云ふので、梅田から乗客は殆んど満員の有様
であつた。敷島の教會の用事で同道した橋本とは、離れて座席を取らなければ
ならなかつた。

米原あたりから眠を催して、夢現の境を通つていたが、箱根あたりになつて夜が明けると共に、爽快な朝の氣にうたれて、すっかり眼が醒めた。窓外は激しい吹降りで、硝子戸を叩く雨の音がひどかつた。

それでも東京驛へ着いた九時頃には、雨風がすっかり止んでいた。主事や谷岡君に迎へられて支廳へ行くと、支廳では祭典の準備をする爲めに、管内の教會から日の寄進の人々が澤山手傳ひに来ておられた。

朝食を頂いて暫らく休憩してゐると、谷岡君が電報持つてやつて來た。今頃何だらうと開いてみると、九時假神殿が倒壊す、怪我人なしと敷島から打つて來たのである。橋本に見せると橋本も驚いてゐた。然し私しは其の瞬間、是れには神様の深い思惑のあるのを感じた。

それで五日の朝歸る返電を打たせて置いたが、五日に管長公が上京されたの

で、其の翌晩たつて七日の朝歸つて來るなり、大教會へ行つてみた。然し其の時は役員の骨折りに依つて、再築に着手されていたので倒壊のみじめな有様は見出せなかつた。

私しは自分の感じた所を卒直に、役員等と呼んで話した。何故だらうと心に疑惑をもつて、不安の心持でいたのが、始めて明るくなつた様に勇んでくれた。私しは茲にも亦神様の試練のあつたのを見出した。

それから再築は勇ひよく始められた。そして廿四日の四十年祭に充分間に會ふことが出來た。同時に私し始め役員が、之れに依つて多くの教理を會得することの出來たのは、望外の幸せであつた。苦しみの中に成程うまい味のあるものである。

事務の統一

それだけでなくとも事務の煩雑には、部下の人々が閉口していたのであるが、職制が實施せられてからは、一層嚴重な調査があるので、一字間違つてもそれ訂正、文字が分り悪いからそれ訂正、日が書き入れてないからそれ訂正、甚だしいのになると訂正の爲めに半月や二十日を、無駄に暮すと云ふ有様であつた。部下の迷惑この上もない。

書類の完備は洵に結構である。然し之れを取扱ふ者に、今少しく人情味があつたならば、すら／＼と行きそうに思へることも、理屈を云へば角が立つ、地頭と泣く子は何んとやらで、無理だと思つても御尤もと、仰せ通りに訂正して來たのである。

所が今度は書類を支廳から教廳へ、直接傳送されることになつた。理とやらを重んずる教廳としては、要領を得過ぎていると思つたら、管長公の思召から出たとのこと。同時に事務も統一されて、誤字訂正の無い様雛形を示されるとのことである。私しは斯した日の、早晚來たるのを待ち望んでいたのである。唯翼ふ所は管長公の思召しを體して、馬鹿丁寧な無駄なことを省略して、なるべく事務は簡單に、且つ迅速に扱はれたいことである。戯談ではあるが、常識が缺けているのではなからうかとか、メンタルテストを行つてみたらとか、陰口を叩かれぬやうに、きび／＼した事務の執り方をして頂いたら、部下の人々がどれだけ助かるかも知れない。

大きい脱字

本月の十八九日である。本部からの歸途道友社へ立ち寄つて、四月二十日號を貰つて歸つた。讀む譯ではないが、一應眼を通すのが習慣になつてゐるので火鉢の前に座り込んで、始めから頁を繰つて行つた、當然私しは自分の「番茶の夜」に出合なければならぬ譯である。

事實を告白すると、私しはあまり自分の書いたものを讀むのを好まない。それは未だ若い頃には、自分の書いたものが印刷されて來るのが待遠しくて、二度も三度も讀みかへして、獨り喜んだり失望したりしたものはあるが、今ではもう何等の興味も感興も起らない。むしろ自分の荒んだ心持が露骨に現はれ

ているのが、嫌でたまらないので、成るべく讀まぬことにしているのである。

所が其の日には何心なく讀み始めたのである。すると簡単な禮狀と云ふ一節が、何んのが書いてあるのか、一向に其の意味が分らない、是れは變だと讀み返してみたが、依然として意味を捕へることが出來ない、私しは自分の頭が悪くなつた結果斯んなものを書いたのだらうと、内心大いに悲觀していた。

二十二日に丁度編輯會議があつたので、夕方から道友社へ出懸けて行つた。

小野君に會つて「簡単な禮狀」は如何にも意味をなしていないが、印刷の時抜けた所が無いのだらうかと尋ねてみた。來合せた人々もあれはどうもおかしいと云ひ出した。然し校正までしたのだから、間違は無い筈だと西原君が云ひ張るのを、無理に原稿を取り出して調べてみると、豈に計らんや、原稿一枚すつかり抜けている。誤字や脱字はよくあることだが、原稿紙一枚の脱字はあまり

に脱字が大き過ぎる。之れが番茶の夜にふさはしいとでも云ふのだらう。

眞實の世渡り

人間は凡て優越した心持を欲するものである。美しくしい女は其の姿態の美を以つて、男の心を魅惑すると共に、女に對して優越の誇りに陶酔する。力ある男は其の體力を以つて、他人を征服すると共に、自分の權力を得ようとする。智恵ある者は其の腦力を以つて、他人より卓越した情感に生きようとする。是れ等は何れも自分の長所によつて、荒波の様な社會に處して行くのであるから、洵に止むない世渡りで、一應は是認するより外はないのであるが、然し斯うした處世が果たして最善なものであるかと云へば、私はそれはあまりに

無謀だと答へたい。

何故なら美や力や智恵は、成程人の心を征服する力をもつてゐる。然しながら自己を守る力、即ち其の美や力や智恵が何時まで持續されるかとなれば、極花一朝の夢ではないか。甚だ心細い譯である。美人の老後や、力士の晩年、智者の失脚などは、改めて云ふがものでもない。何れも頼むべからざるものを頼みにして、麗はしい花を咲かせた者が、當然結ぶべき苦き結果に過ぎない。

人間には左様した一時的なものではない、そして普遍的なものと尊いものがある筈である。それは心の奥底に隠されてゐる眞實である。是れを靈性と名づけても、靈魂と名づけても同じことである。其の眞實こそ久遠に生きるものであり、凡てを生かす靈泉である。私は何故世の人が、此の眞實を頼りとして世渡りをせないのかと思ふ。年と共に衰へたり、身と共に亡びるものを、唯一

の力草とする事は、賢明なるべき近代人としては、あまりに考へが無さ過ぎる。私は眞實を神として生活することの、最も合理的なることを敢て力説したいと思ふてゐる。

青年の思想化

本部を始め部下一般を見渡してみると、相當教育を受けた若い人達が、次第に増加して来た。これは本教の爲めに喜ぶべきことではあるが、信仰の結晶たる教團が、是れに依つて多少思想化されることは、如何にしても避け難い。現に四十年祭前にも、思想運動と云ふほどのものではなかつたが、思想的に目醒めた人々の間に、新しい信仰を要求する傾向が、著しく現れかけてゐたのである。

所が丁度其の頃から、教祖の四十年祭が提唱されたので、全般の注意が年祭に集まつたのと、其の活動が次ぎから次ぎに、激しく行はれたので、凡てものが其の大勢に押し込められたやうに、新しい信仰の要求も、何時の間にか下積みにされてしまつた。

然し一度芽生えたものは、何時か花の咲くまで伸び行くものである。思ふに四十年祭が済み、各教會も一段落が付いたなら、内容充實の聲に伴ふて、又新しい信仰の要求が、随時随所に、何等かの形を變へて現れて来ることを、豫め覺悟せなければならぬ。

幸ひに何等の蹉跎なく、至極自然に之れが轉回して行つたならば、甚だ結構なこと、私しはそれを欲し且つ望むものであるが、是れに處する方法を誤つ

たならば、多少の混亂を生ぜぬとも限らぬ。

傳統のみを唯一の信條として、自己を守らうとすることは既に其の時が過ぎてゐる。生命を傳統に宿して、事實の價値に於いて、信賴の念を起さしめなければ、心から服する者があらうか。教服や衣冠に對する尊敬を、自己の價値と錯誤するやうでは、今後の若き人々を導くことなどは出来さうもない。もつと大きい、もつと廣い心でなければ、新しい信仰を抱擁することは出来ない。

小さんの話

六月十日に管長様の書齋の、上棟式を行ふことになつてゐたので、其の朝十時頃に東京へ着いた。十一時から上棟式を行ひ、午後一時から青年會の講演が

あつた。講師は中山君、中台君、小野君と歴々の御三名で、聴衆も可なり多かつた。語る者も聞く者も熱心で、五時半に無事閉會と云ふことになつた。

夕食を頂きながら小野君から、今夜は何處へ案内するかと、大和以來の約束を催促せられる。何處がよからうと此處がよからうと協議まぢくの間、寄席がよからうと決まつてしまつた。

寄席なら立花亭と深谷君を合せて五人、管長様の自動車を拜借して飛び出した。立花亭には小さんがかゝつてゐる。斷つて置くが小さんとは女の名ぢやない、落語家の名である。近頃の名人として、小さんは落語界に重きをなしてゐるのである。

私は表の立看板を見て、是れは變だと思つた。何故なら小さんは二三年も前に、寄席から引退した筈である。それに其の名が出てゐるとは如何したのか

と中台君に尋ねてみた。中台君は引退したのは事實だが、如何も小さんは好きで止めてゐられないと云ふので、又あゝして出てゐるのだと云ふことであつた。

好きで止めてゐられない、私は小さんの名人たる所は、此所だと思つた。恥も外聞も忘れて、好きな道に進んで行く、やつぱり小さんは名人だ。お道の人をも人を助けるのに此所まで徹底せなければ、本當の道とは云へない。口頭の戯語それ何するぞ、好きでなければ駄目だ駄目だ。

宗法の研究会

本席の二十年祭が行はれた翌日、道友社主催の下に、同人の宗教法案の研究

會が開催された。何がさて口喧しい連中のことゝて、議論百出と云ふ有様であつたが、就中調査會に本教を度外視して、本教から委員を任命せなかつたと云ふ點が、最も遺憾とせられたのは當然である。

當局の是の明盲目同様の處置に對して、大いに抗議を申し込むべしと云ふ者もあれば、意見書を發表して、社會の輿論を喚起すべしと云ふ者もあり、相當本氣になつて論ぜられていたから、或は何等かの形式をとつて、其の意志が現れて來るかも知れない。

法案に就ては佛教と神道と取扱の相違あることや、教師の任命に關することや、訴願を認めた點などに付いて、種々論ぜられたが、議案となつたものが骨子と云ふだけであるから、充分に研究することの出來なかつたのは仕方がない。それでも斯う云ふ點が、研究に價すべき重要な所だと、大體の見當が付く

様になつた。

翌日管長の玄關へ行くと、諸井君が來合せて、朝日新聞に宗教法案が出てい
ると注意せられたので、すぐ新聞をひらいてみると、成程法案が出てゐる。然
かも全部百二十五條と云ふ大きなものである。讀んで見ると、前日問題となつ
た點が、何れも明細に規定されてゐるので、折角の努力が水泡に歸したやうで
馬鹿らしいこと夥しい。

今二三日後れたら、研究会も大いに意義があつた譯だが、少し早過ぎたので
無駄になつた。けれども之れに依つて本教の若い人達が、宗教法案に對して如
何なる態度でいるかと云ふことを、明らかにするを得たのは、お互の爲めに甚
だ喜ぶべきことであつた。

解散の購買組合

昨年の九月頃であつたと思ふが、購買組合の必要か力説せられて、それまで
各諸所の事務員が、遠慮しながらやつていたのを教會長が飛び出して、増資を
するやら役員の改選をするやら、大した騒ぎを演じたものだ。

是れは四十年祭に當面して、其の準備をする必要があつたからでもあるが、
兎に角其の後の役員の鼻息の荒らかつたことは、物凄じい有様であつた。其の
結果四十年祭の準備にどれだけの効果があつたのか、聞く間もなかつたけれど
四十年祭後の成績は、あまり良好ではなかつたやうに聞き及んでゐる。

其の後米の買込みが多過ぎたのと、従業員の不正行爲があつたとか、米價が

下落したとか、種々なる理由に依つて、多大の損失が暴露せられた。左様云ふ筈ではなかつたがと云つてみた所で、出来てしまつたことは仕方がない。何んとか前後策を講ぜなければならぬと云ふので、當局者は協議の結果、購買組合解散となつた。

其の理由の一つとして、宗教家が斯うした事業を始めるのはよくないと云ふのがあつたとか。今にして此所に氣が付いたのは遅いと云ふべきか、結構と云ふべきか。御教祖は八軒八商賣とも仰せられているから、あながち商賣が悪るいとも決定出来まい。

それから去年の九月頃に其の必要を力説せられたものが、今年の五月には其の不必要が力説せられるのは甚だ可笑しい。損をしたから不必要と云ふ譯では理由が成立たぬ。

然し御道のことだから、其處は何んとか圓滿な處置が採られるだらうが、世界並なら大事だ。馬鹿を見たのは創立者たる事務員で、一時は油揚を薦に取り入れた感があつたらうが、今にして思へば、關係せなかつたので結局幸合せと云ふものだ。

教理の開拓

いくら御馳走だからと云つて、毎日同じものを喰べていて、堪能するつもりでも、胃の奴が要求せなくなつて来るものだ。嫌々喰べては身に附かないのであるから、何か他に新奇なものを求めて来るのは、止み難き自然の要求である。教理は心の食物である。結構な教理であつても、同じことばかり聞かされて

いては、いつとはなしに倦怠が生じて来る。四十年祭が提唱せられてから、本
教の説明が一生面を開いたので、其の教理に刺戟せられて、精神的の活動が著
しく活氣を呈したのであるが、現今ではそれも亦行詰つてしまつた。

現在各大きい教會や、各地の教務支廳から、會報のやうな月刊雜誌が、雨後
の筍の様に簇出したが、何れを讀んでも千變一律で、未だこんなことを云つて
いるのかと思はれるやうな、教話などが滿載されている有様だ。是れでは内容
の充實が唱へられてゐる現在としては、蓋し物足らぬこと甚だしいと云はなけ
ればならぬ。

目下の急務としては、教理の新しい方面を開拓することではなからうか。敢
て奇を好むと云ふのではない。心が成人したらそれだけ、新しい體驗から、意
味深い眞理が悟れなければならぬ筈だ。又た若い人々は新しい思想から教理に

新しい生命を宿していくことも、神に奉仕する一つの道ではなからうか。

何はともあれ本教の現在として必要なことは、人の心が高なりする様な、
深刻にして靈感に充ちた、古くして、且つ新しき生命を持った教理の發生であ
る。抜殻の様な教理は最早や其の必要がない。私しは凡ての人が、先づ左様し
た教理を要求し來たることを望むものである。何故なら必要は凡ての物を生み
出す元となるからである。

教規及規定の訂正

久しく問題となつていた宗教法案が、文部省から發表されて、目下調査委員
會で審議中である。原案が何の程度まで修正されるか、今の處では何とも見當

が付かないが、委員會の審議が済んだら、法制局に廻附され、更に樞密院の同意を得て、多分次回の議會に政府から提出される運びになるのであらう。議會に於いて此の宗教法案が、如何なる運命に出合ふか、殆んど豫想もされないが、無事通過するとなれば、直ちに來るものは、本教の教規及親程の訂正である。何故なら現在の教規は、宗教法が施行されると、其の効力が六ヶ月より無いので、變更するなり訂正するなりして、改めて文部大臣の認可を得なければならぬからである。所が現在の教規及親程は、明治三十年代に起草されたものであるから、無論時々訂正や増補が行はれては來ているが、現在の本教の教規及親程としては實際に於いて不必要なものもあれば、訂正を要する點もあるから、此の際大いに論議して、本教の發達をより可能ならしむるやうに、改訂せなければならぬ。

それには何んといつても、衆知を集めることが必要である。僅少の人々に依つて考へられたることは、一面から見れば整頓しているが、他の方面から見れば、不合理な點も見出されるものである。故に當事者は無論の事、教會の方面からも、教師の方面からも、信徒の方面からも、出來得るだけ多方面の人々の意見を綜合して、立案せられなければ完全なるものは出來ない。それには特に委員を設けて、ほつ／＼研究を始めても、決して早や過ぎるとは云はれない。一夜造りのものは得て過失のありやすいものであるから、私は衆知を集めると共に時間を與へて、完全なる教規及親程を制定されんことを望むのである。

御話の狙ひ所

此の頃の若い人達の話聞いてみると、相當に熱もあれば言葉も奇麗であるから、古い人々の話と違つて、聞き苦しくもなければ舟を漕ぐ様なこともない。至極心持よく聞かれるのは結構であるが、身に泌みる様な感じが少しも出て来ない。悪るい酒を呑んだ時の様に、頭にはびんとこたへるけれども、酔が身體に廻らないと同じく、頭で成程と思へても、身には少しも應へて来ない。全く空吹く風を雲の動きで知るやうなものである。

此の點になると昔の人の話しは、如何にも聞き苦しい所もあれば、何處が尾やら頭やら分り悪いけれども、寒さ暑さと同じやうに、捕へる所が無い中から、

身に泌みて感ぜられる。話が畢つた後でも、何んだか話し中に受けた感じが、時々無論断片的ではあるが、胸によみ返つて来る。そして其の理由は分らないが、其の通りにせなければ他に途がないやうに思ひ込まされて行く。其所に御話の味があるのだと私は思つている。

條理が正しいと云ふこと、理論的であると云ふこと、説明が徹底していると云ふことは、洵に結構なことではあるが、それだけでは未だお話としての價値はないのである。多少は説明が間違つていても、條理が立つていなくても、非論理的であつたにしても、其の話を聞くことに依つて、聞く者の心が淨化されたならば、それで御話の價値は認められるのである。更らに進んで其の性格を一變せしむる迄になれば、最早や最上のものである。御話は此所まで向上して来なければ、眞の價値を現はすことは出来ない。

斯う考へて來ると、今の若い人々は御話をするのに、其の的を誤つてゐる様である。即ち話をせんが爲に話すのであつて、聞く人の心持や境遇を少しも考へて居ない。これでは折角時間を費してお話しても、何の甲斐も無い譯である。私は若い人達が今少し人々の心を目標として、其の心境を一轉せしむることを心懸けて、身に泌みるやうな御話をせらるゝ日の、速やかに來らんことを望むのである。

中學校の増設

御道では學問は不必要だと云はれて來た。成程人間が生きて行くのに學問がなくとも生きて行けるし、眞實の心になるには、學問がなくとも眞實になれ

るのであるから、學問が不必要だと云はれたのも尤もである。然し教會を造り教派を立て、行く以上は、飽く迄學問は不必要だと云ふて、押し通して行ける譯のものではない。

中學校の前身である教校が出來た時、多くの人は是れに反對であつた。けれども時代の趨勢は、次第に學問の必要を感じしめて、現在では其の他に五つの學校を有するやうになつた。多分昔の人を今日あらしめば、あまりの變化に驚くに相違ない。けれども目下の氣運から考へると、是れを以つて足れりとすることが出來なくなつて來た。

今度發表された宗教法案が、法律として施行せられるに至つたならば、教師の資格が中學校卒業程度の學力がなければならぬと規定されているから、準教師でなく教師となるのには、如何しても中學校を卒業して置かなければならぬ

のである。所が本教には中學校と云ふべきものは、女學校と合せて二校より無いのであるから、卒業者が全部教師となるにしても、僅かに二百名前後である。是の僅かな人数を以つて、一萬に近い教會長の後継者を造ることは、絶対に不可能なものである。幸ひに止むを得ざる場合は、準教師を以つて後任者たらしむることも出来るが、然し之れは止むないと云ふ條件付であるから、止むを得ざるものと認められなかつならばそれ迄である。

斯うなつて來ると如何しても、中學校を増設して多くの卒業生を出すより方法は無いのである。然かも今年新たに設けても、五年後でなければ卒業生が出て來ないのであるから、是れは本部も部下も大いに考慮して、支廳管内に一ヶ所宛設けるか、或は又た各大教會に於いて設けるか、何んとかして後継者を得る爲めに、中學校を増設することが、本教當面の問題の一つであらうと思ふ。

谷本博士の本誌評

過日お地場を訪問して、女學校の講堂で講演をせられた、谷本博士が本誌を評して始めから終まで、斯く自教を讃した雑誌は、他に無からうとの事であった。全く御説の通り、本誌は一頁から最後の頁まで、本教を讃め稱へることに於いて一貫している。博士は是れを如何云ふ意味で云はれたのか、其の眞意を知ることは出来ないが、大體二つの意味に採ることが出来ると思ふ。

其の一つは善意に解するのであつて、本誌が徹底して自教のことのみを掲載するのは、信仰の横溢してゐる結果、左様せなければ得心が出来ないので、他を顧みるの暇なく、主として自教に關することのみを、書きもすれば掲げもす

るのであると。斯うした意味から評された言葉とも、思ふてみれば思へないこともない。

又反對に悪く解したならば、井戸の蛙と同じことで、世界みずに、自教のことばかり悦んで、意張つているとしか見えない、随分御芽出度雑誌であると云ふ様にも解せられるのである。

何方が博士の心持であるか、是れは他人の伺ふべからざるものであるが、博士自ら稱して居られる様に、教外者にして本誌を眞面目に讀まれる人は、博士の外には少ないのは事實であらう。然し博士が毎號本誌を讀まれるのは、何に興味を感じて居られるのであらうか。

それは云ふ迄もなく、本教の將來に對しての興味であるに相違ない。新興の宗教である本教が、如何なる経路を通つて進んで行くか、恐らく之れは博士と

共に、多くの人が知らんとする所であらう。それを本誌に依つて知らうとする博士は、全く本誌の知己とすべきである。

吐血の瞬間

本月廿三日に、宗教法案に對する、神道各派準備委員會へ出席して、支廳へ歸つたのは五時過であつた。前日妹が死産した通知があつたのと、廿四日は敷島の月次祭であるから、是非七時の急行で歸ることにし、夕食を諸井君と二人で済すと、直ぐ東京驛へ急いだ。

東京驛で見送りの人々と別れて、車上の人となつた私は、夜の東京を窓外に眺めつゝ、二十分ばかりすると非常に渴を覺えたので、洗面所へはいつて行つ

た。洗口水をコップに移した刹那、突然吐氣を催ほして來たので、思はず洗面器へ吐いてしまった。

私の心では出立の際、少しお酒を頂いたのが過ぎたのであらうと、左様心には懸けていなかつたのである。所が白い洗面器一面に、紅の血が四散している。それを見た刹那、私は何んとも名状すべからざるものに、ぶつかつた様な氣がした。鏡に寫つている私の顔は、見る間に血の氣を失つて行つた。

私は暫く立つた儘でいたが、やがて洗面器を水で洗つて口をうがいすると洗面所を出た。まるで空を歩るいて、もいる様に氣力が失せてしまつている。幸ひすぐ側が私の寢臺であつたから、倒れる様に身を投げた。

それから私は様々のことを考へた。それを茲で云ふ暇はないが、私にしては大きい賜であつた。國府津へ着いた時寢臺が出來たので、私は階子を昇つて、

上段の寢臺へ身を横たへた。

暫くして眠りに陥り眼を醒した時は大津であつた。身が疲れていたので、よくねむれたので氣持が好かつた。朝食を濟ませて大阪へ着いた時には、昨夜の吐血が單なる悪夢の様に感ぜられるばかりであつた。

絶版に際して

私が文筆に親しんだのは、十四の年からである。始めの間は新體詩がすきで、好んで讀み好んで作つた。それから小説が面白くなつて、自分でも創作して悦んでいた。學校から歸つた時にはそれでも書きためたものが、中程の支那靴に一ぱいあつた。

學校から歸つた當時の私は、眞剣になつてお道のことを考へるやうになつた。そして物質が我々人間の靈性を曇らすものであると同時に、思想も我々の心を濁すものであるのを知つた。自己本來の面目たる靈の目醒は、一切を放棄することに依つて現はれることを知つた。私は自分の過去が厭になつた。否自分自らさへ厭になつた。

妻の病氣は私に一層向上の道をたどらしめた。私は自分の過去を懺悔する意味に於いて、總ての原稿を焼いてしまつた。愛兒に離れる様な傷ましい心が、未だに私の心に残つてゐる。

前管 長の死と父の死とは、私に大きな感動を與へて、其の性格を又一變せしめた。私は自己を顧みることなく、本教の發展の爲めに、凡ての努力を捧げやうと考へた。私は又た文筆に親しむやうになつた。けれども最早や何の感激

もない、冷たいものに過ぎなかつた。

私は自分の書いたものを、今では讀みかへしてみる氣持にさへなれない。生命をかけたと云ふでなし、努力をしたと云ふでなし、時に應じ旬に従ふて、書き流したのであるから、之れは當然である。

それでこれを機會に、私の書物は道友社に依頼して、今後絶版にして貰うことに決めた。徒らぬ無意味なものを残して置くのは、自他の爲めに甚だよくない。そして出来るならば暫らく沈黙の世界に住みたいと思つてゐる。

青年の登用

四十年祭の提唱が、本教の全體に渡つて大影響を與へたことは、今更云ふの

要をみないが、其の中で、あまり人々の氣付かないことで、實は本教の將來に關して、重大なる關係のあるのは、青年登用の一事である。

若い才能のある者に、其の活動の舞臺を與へて、力量を發揮せしむることは人物經濟の上から云つても、又本教將來の發展から見ても、洵に意義のあることで、教外者の人々は、本教の此の英斷に對して驚異に感じている者もあれば羨望の眼を以つて見ている者もあると云ふことである。

實際から云つても、本教の前途は青年に依つて支配されるのであるから、今から青年に種々なる經驗を積ませて置くことは至極當を得た處置であつて、先輩の人々が寛大なる心持で、青年に總てを委せられるのは、青年の感謝せなければならぬ所である。

然し是の青年の登用について、多少杞憂せられることは、本教の信仰が漸次

低下せぬかと云ふことである。無論信仰には老若男女の相違はないが、其の強さ、其の深さ、其の廣さに於いては相違がある。青年の信仰が果たして、教内の興望を荷つて立つだけの、靈的な力を生み出せようか。

才能に秀で、いることが、無論信仰に徹していることではない。家柄が好いと云ふことが眞實のある譯でもない。更らに本教の重職につくことが、信仰の向上と關係あるとは云へぬ。是れ宗教界に於いて、世襲が問題とせらるゝ所以である。

所で私しの恐れることは、現在の青年に甚だ信仰味の少ないことである。眞に人々を畏敬せしめる強い信仰に生きている人の少ないことである。講演や事務や經營などは、熱心にならなくても宜敷い。もつと本質的な信仰の一路に向上して、靈的人格を造る爲めに努力せなければ、延いて本教の將來に悪感化を

残すことにならう。私はこれを恐れるのである。

大きい夢

頭の中で考へたことを直ちに行ふとしても、出来ることもあれば出来ないこともある。若し出来ないことを、實現せしめようとしたならば、理想だ空想だ夢に過ぎないと、嘲笑せられてしまう。

教内に於いても、一般社會と同じやうに、現實的に價値の無い事は、嘲笑とまでは行かないが黙殺されてしまう。殊に教祖の時代から遠ざかるに従つて、此の傾向が著しくなつてゐる。現に各教會の人々や信徒の心の内を見入つて、何等の理想もなければ夢もない。願ふ所は唯々現實的なものばかりである。

理想を描き夢みることは、成程實際生活から云へば、無意義なことであるかも知れない。然しながら人間の價値は、實際生活にあらずして、高き理想を持つことではなからうか。理想の實現は困難であるから、それに力を盡すのは無駄だと云ふが、困難だから實現が尊いのではないか。

教祖の理想は教祖一代に於いて實現されなかつた。歸幽後四十年にして尙實現されない。或は百年千年後にも實現されないかも知れない。それ程大きい理想に生きられたから、教祖の生涯は尊いのではないか。

理想があれば凡て意識が生じる。無理想は動物的な生活と何等撰ぶ所がない。教祖は人間に大きい理想を與へられたのだから、我々は其の理想をいつも夢みてをらねばならぬ。そして其の夢を實現する爲めに、いそしまねばならぬ筈である。

所が今の布教者にも信徒にも少しの理想もない。はい／＼と這ひ上がるのが道であるとか、親の言葉がなければ何も出来んとか、消極的な心持や、現實生活に囚はれて少しの理想をも持たず、向上の道をも考へてゐない。

私は本教徒が、嘘でも間違でもよろしい、大きい夢を描いて、それを實現する爲めに、一心になつて働くやうな心持になる日の來ることを、心から祈るものである。

偶像の苦味

以前未だ東京の學校に居た頃は、布教者や信徒に會ふと、心の底から打ち解け合ふた、温かい氣持になることが出来た。是れは私しの年が若かつたにもよ

ろうが、それよりもお互ひの間に、少しの隔ても無かつたからである。其の後本部に歸つて青年をしてゐる頃も、左様した氣持を持続することが出来た。

昨年堀本さんの後任として、東京の支廳長に任命された時、私は以前のやうな心持で、布教者や信徒に接しることが出来ると、心の内では悦んでいたのである。それから十ヶ月の日が過ぎたが、實際私しの期待は裏切られて、少なからず失望したのである。

無論其の頃からは十六七年も過ぎてゐるのであるから、其の當時の布教者や信徒が少なくなつてゐることも事實であるが、それよりも私しが支廳長であるといふことに依つて、大きい溝の造られてゐることを最近氣附いたのである。人間が人間として、相接することの出来ない程、心淋しいことはない。多少の敬意を表して貰ふことは、決して不愉快なことではないとしても、心からなつか

し味を感じずるものではない。禮に於いて缺くる所はあつても親味になつて、話し合ひ語り合ふことが出来たら、人生はもつと樂しめるやうに思はれる。

偶像の悲哀と云ふことを云はれているが、全く偶像ほど淋しいものはない。理を尊ぶとか理を立てるとか云ふことが、悪くすると人々を偶像化するものである。私しは是れから本教にも偶像が澤山出来るだらうと思ふ。

偶像視されている身には、時にお道の人よりも遠慮もなく、心をぶちまけて話し合ふ世界並の人達の方が、なつかしく思へる時がある。これは何んでもない事のやうではあるが、是の弊風を一掃せなければ、本教の憂とならぬとも限らぬ。具眼の士の一考を願ふ。

謎の箱

龍宮から貰つて歸つた玉手箱を開いて、浦島太郎は直ちに白髪の老翁となつた。若し玉手箱を其儘にして開かなかつたら、浦島太郎はなほ青春の楽しみを味ふことが、或は出来たかも知れぬ譯である。

然し玉手箱は獨り浦島のみが與へられた、謎の箱とばかりみるべきものではない。人間は此の世に生れる時、何人も謎の箱を持たされて、送り出されて来たのである。唯形がないだけに自分が左様したものを持つていることに、氣が附くと氣附かないとの相違があるばかりである。

若し其の謎の箱を自分が所持していることを覺つた者には、玉手箱が浦島に

大なる疑惑であり、深い誘惑であつた如く、其の謎の箱に對して、疑惑を感じると共に、其の箱の中に何物があるや、謎を解きたい誘惑を感じずにはいられなくなつて来る。

玉手箱の中には恐らく浦島が期待したやうなものは少しもなく、唯自分を老翁化する白氣のみであつた如く、人々が所持する謎の箱を開いてみたならば、決して人間が期待する程のものはなく、却つて自己を苦しめ、自己を悲しませるものであるに相違ない。

疑惑の眼を鋭うして、飽く迄も此の謎の箱を開いて、眞實の姿を見るべきであるか。或は誘惑を退けて、空虚な色彩られたる人生を楽しむべきか。其の何れを擇べきが本當であるか。

本教の人々は今此の岐路に立つている。右すべきか左すべきか、其進路に迷

ふている有様である。何れでもよろしい。然し浦島は終いに玉手箱を開いてしまつた。眞實を見出すことは決して楽しいものではない。然し開かざれば又盲目の笑を如何ともせられぬであらう。

賢明なる讀者

極く小さな雑誌を發行しても、普通の社會で始めたならば、多少の反響はあるもので、少しでも異つた調子を出せば、其の議論に同感し共鳴して、投書が舞込んで来るものである。

然るに道の友に於いては、二十年近く關係しているが、其の間に雑誌の内容も形式も、随分變化して來たし、又讀者に對して反響のありそうな問題を捕へ

て、書き立て、みたこともあつたが、泥の中へ石を投げ込んだやうに、何の反響もなく消えて行つた。

是れは何故であらうかと、随分久しい間私しは考へていたのである。そして一重に是れは執筆者が、未だ讀者の心理を理解して筆を執らぬからであるとも思ふてもみた。所が最近になつて確かに是れだと、其の理由を明瞭にすることが出来た。それは唯一言、讀者が賢明であつたからである。

過日東大の上杉博士が本部に参拜し、舊神殿に於いて一場の講演をせられた其の時博士は自分は東大に於いて、廿五年間憲法の講義をした。今度大成會の講演で東奔西走した結果、人間は正直で眞面目であれば、是れ以上のことはない。一ヶ年二ヶ年講義する憲法の講義も是れに盡きると云ふことを、始めて覺つたとの話であつた。

正直で眞面目であれば、教へられたくなくとも決して間違つたことはせない斯う述べられた博士の言を聞いて、私しはこれだと始めて分つた。筆で如何に動かそうとしても、正直で眞面目な本誌の讀者は、文字などに迷はされず、自分の爲すべきことをちやんと知つているのである。

是の意味に於いて本誌の讀者は賢明なのである。何卒か今後永久に、此の賢明なる心を失はぬ様にせられたい。

更らに困苦を

今から十年程以前のことである。私しの知人が母校へ入學した。秋の期であつたので暫くすると冬になつた。夏は殊に暑い冬は殊に寒い大和であるから、

生來寒がりの知人は辛棒が出来なくなつた。それで随分困つてゐるやうであつた。

所が暫らくすると其の寒がり家があまり寒がらないやうになつた。是れは變だと思つたので、私は其の男に如何したのだと尋ねてみた。すると笑ひながら其の男はこんな話を聞かして呉れた。

冬になると自分は寒さに困るのであるが、今度は學校に通つてゐるから、更らに寒さを感じられて、何んとも仕様がなかつた。それで或る日大いに勇氣を起こして、桃ノ尾の瀧へ行つて、氷柱の垂れてゐる岩へ、眞裸體になつて上つて瀧にうたれた。

其の時は身を切り裂かれる様に感じたが、是れが辛棒だと思つて暫らく打たれてゐた。其の中身體の感覺がなくなるやうになつたので、岩を降りて衣物を

着た。暫らくすると身がほかく暖かくなつた。行く時は寒かつた道も歸りに寒いとも感ぜなかつた。それから寒さをあまり感じなくなつたと云ふのである。

是れを聞いて私は成程と大いに覺つたことがあつた。それで或る夏、最も暑い日に無理に家を出て、四五人伴れで大阪へ行つた。伴はれて行つた者は全く困り切つてゐた。然し私は其の夏ほど、暑さ知らずで通つたことはなかつた。

是の道理は獨り寒さや暑さに於いてばかりではない、人間が此の世に處して行く上にも、心得て置くべき眞理である。教祖の教へも全く此の道理を教へられてゐるのである。だから苦しい時に更らに苦しみ、困る時に更らに困つたならば、其の現在に苦します困らずに處して行けるのである。是れが陽氣暮しで

はなからうか。

現實を超へて

本教が他の教宗派に較べて、現實味が多いと云ふことは、今更ら云ふ迄も無いことで、科學萬能の今の時代に、次第に發展して行く理由も、人間の實生活と深い交渉を持つてゐるからである。此の點に附いては私しも本教が現實的であることが、力強い一特長であると信じてゐるのである。

然し此の現實的であると云ふことは、教化の立場にある人々を、往々にして誤らしめるものである。現に本教の人々が、本教が現實的であると云ふ一面のみを重く見過ぎて、現世に於いて何か意義のある成果を見出さねばならぬとか

價値ある仕事をせなければならぬとか、一時の功名心に左右される様な傾向が次第に濃厚になりつゝあるのは、全く此の現實的傾向の、一つの大きい弊害である。

私は本教は其の表面は、如何にも現實的であるけれども、少しく神意の存する所を伺ふただけでも、其の裏面の超現實的な方面が、際涯なく擴まつてゐるのを観するのである。又神意と云ふものは、僅かな人智を以つて測り得べき小さなものではない。人間の生死の如きは、人間自ら思ふ程に神意としては重大なるものではない。

是れ御教祖が魂の生き通しや、死は古き着物を新しき着物と着替へる様なものだと説かれた所であつて、又理は末代と仰せられ、末長い樂しみと説かれたのも、現實生活より超越した世界に、人心を引き上げた思召しであつたに相

違ない。

然るに現在本教の人々は、末代の理に生きると云ふが如き考を持たず、唯現世に於いて、より幸福なれ、より成功せんと欲するのは、全く教理の一面のみを知つて他の一面を見ざるものである。私しは本教百年後の爲めに、此の傾向を甚だ遺憾と思ふのである。

忘れること

人間の能力の一つとして、記憶と云ふ機能のある限り、絶対に其の能力を否定することは實際に於いて出来ないことである。又此の能力に依つて、人間の生活が向上するものであるから、否定する必要もないのであるが、人間が新し

い感じを持つて、人生をより深く、より力強く歩んで行くには、忘れると云ふことも又必要なる條件である。

想ふに子供が天真であるものは、何等の過去を持つていない純然たる白紙の如きものであるから、活々とした活動が出来るのである。若し過去世に於ける記憶を持ち續けて産れたならば、左様快活にはなれない筈だ。是の道理から押して考へると、人間は物事を記憶することも必要であるが、又それを忘れることも必要でなければならぬ。

人に依れば記憶は六ヶ敷いが、忘れるのは雑作もないと思ふてゐるが、實際は却つて其の反対で、記憶することよりも忘れる方が更に困難である。今の社會では記憶のよい者を聰明として、秀でた頭のように思はれてゐるが、不必要なことをどん／＼忘れ得る人を、誰れも顧みないのは甚だ間違つてゐる。

人間を眞に生かす爲めに、教祖は阿呆になれと教へられたが、其の阿呆とは全く凡てを忘れ得る者になれと云ふ意味であつて、痴者たれと云はれたのではない。即ち眞は新で眞實に生きるものには、常に新しい心持で居なければならず、新しい氣持は人間自身の殻を打ち破る所に生じるのであるから、過去の一切を忘れ去れば新しき力が生じて來る譯である。

聰明たることは決して人間を眞に生かすものではない。眞實の心をもつて始めて人間は、偽りなき世界を見出すことが出来るのである。それは何事も忘れること忘れること、忘れ得たれば懺悔である。

天地と身體

天地に流れているリズムと、人間の身内に動いているリズムとは、同じ律動に支配されている。私しは此の十日間泉州の一漁村へ子供を伴れて避暑し、朝に夕に海邊を散歩しながら、此の感を深うしたのである。

明けても暮れても打つては返へす波の音、それは人間の血管を流れ行く、血汐の響きではないか。嵐が吹き波が高鳴つてくるのは、人間の感情が激して、聲高く叫ぶが如きものではないか。波靜かなる夜は、満天の星辰が海底に映つるが、人間の冷靜なる心に一切が映じ出だされると同じである。

殊に私しが驚異を感じたのは、引潮の時には怪我をしても血潮の出るのが少

なく、満潮の時は出血が夥しいことである。又た人間の出産は必ず満潮の時であり、呼吸の止む死の瞬間は、必ず引潮の時であるといふことである。

斯様に人間の生命と潮流の變化とは、必然的な關係があるのは、此の間に何等か深い原理があることを示しているのである。然し是れは單に、潮流と人間の身内に起る出來事との關係であるが、是れを更らに天地の働きと、人間の生命に付いて考へたならば、もつと必然的な關係が種々見出されるであらうと思ふ。

例へば午後過ぎると、或る種の病人は發熱して來る。又夜中を過ぎると苦しみを感じるとか、夜明けになると樂になるとか、是れ等は皆太陽と人體との關係であつて、此所にも同じリズムの流れてゐるのが觀せられる。

唯我々は其の關係を、あまり深く知つて居ないのである。教祖の如き秀でた心の持主には、必ずそれが明瞭に觀せられたに相違ない。教理は其處から流れ出たのである。我々も此の大なる天地と、此の五尺の身體と、此の間をつなぐリズムをもつと深く考へねばならぬ。

信仰の社會化

本教に對する一般社會の觀方は、大體に於いて、教義若くば信仰は洵に結構であるが、教會や教師には、あまり感心せないと云ふのである。従つて本教を信仰する意志は充分あつても、教會に加入したり、教師の指導を受けなければならぬとなれば、先づ見合せて置く方が安全であると思はれてゐる。

斯うした考へは、本教の立場から見れば随分慢心してゐると思はれるのであ

るが、然し又一方から見れば、本教の方針はあまりに教會中心に傾いてゐることも、非定することの出来ない事實である。此所に本教の者は一考すべき必要がなからうか。

若し教祖の仰せられた、世界一列と云ふ思召しが、社會を教會化すると云ふ意味ならば、別段現在の儘で少しも差支へない譯である。然し教會なるものは眞實の道を世界化する手段であつて、決して目的ではないのである。然るに現在の本教では、神意を支持する偉人格がないので、當然教會が最上の教權を持つてゐるが爲めに、自由なるべき信仰が、多くの條件に依つて壓迫を受けてゐる。

然し是れも長き道程の、一時的過程であるかも知れぬが、然し之れが爲めに本教の信仰が、教會内に止まつて社會化せないことは、何んと云つても遺憾なことである。教會の盛衰と云ふことよりも、むしろ教祖の理想が、どれだけ社會化されてゐるか云ふ方が、更に重大なる問題ではなからうか。私しは最近斯うしたことが、非常に考へられるようになった。心ある人は教祖の思召を、一般社會に徹底せしむるやう、今少し深い考慮を拂つて、努力せられんことを望むのである。

權道の價值

親や上長の命を、唯々として從順に、働いて行くことを以つて、最上の道と心得、安心の地を得たりと信ずるのは、正しい道には相違ない。然し信仰の必要が、左様した者にどれだけあらうか。又それがどれだけ親や上長に、大きい

悦びを齎らすであらうか。

或人は教祖が夫と神様の間に立つて、遂に神命に従はれたのは、要するに權道を踏まれたのであると云つた。本教に入信する多くの人が、夫や家族に反對せられて、然かも尙ほ信仰を止めぬのは、之れ又た權道である。

權道は必らずしも勸むべきでないかも知れぬ。然し若し其の人にして大なる確信があるならば、斷然立つて其の所信に向つて努力すべきである。命惟れ従ふと云ふ小さい孝心に囚はれて、大なる貢獻を捨てるやうであつては、眞の孝とは云ひ難い。

本教の青年は此の點に付いて、大いに熟慮すべきものがありはせぬか。先輩が自己の爲めに、有利に導かんとする曲解せられたる教義に苦しめられて、自分の信仰に向つて猛進することに悩んでゐなからうか。私しの云ふ所は或は正

道でないかも知れぬ。然かし權道として許されるべきものであると思ふ。

然し此の權道を踏む者は、確かな自信がなくてやつてはならぬ。何故なら若し中途にして挫折するが如きことがあつては、却つて自分を誤らせるのみならず、多數の人に迷惑を及ぼすからである。然かし幸ひに踏破し得たならば、神に大なる孝であるのみならず、社會の爲めに貢獻する所も多からうと思ふ。若し人々が此の點に、迷ひのなからんことを私しは祈る。

二つの中心

國家の創業や政府の成立は、種々なる經路を得て發達し、現在の如き状態に進んで來たものであらうが、兎に角國民があつて、始めて政府の存在が必要と

なつて來たのである。本教に於いても、當始に於いては信者のみであつたのが教會組織が出來たり、教師の職分が規定せられたり、漸次今日の如く、發展して來たのである。

本教が國家の通つた道を通つて行くものか、或は他に新しい道を進んで行くものか、將來のことは不明であるが、過去の経過から考へてみると、本教の中心が次第に政府化しつゝ、あることは、近く實施せられた職制に依つても明らかなことである。

所で政府と國民とは、其の利害が必らずしも一致するものでないから、時に政府に反して、其の反省を促す場合があるが、信仰に依つて裏付けられている信者には、殊に本教に於いては、左様したことは皆無であつた。これは本教の誇りとすべき所であるが、將來も果たして現状の儘であり得るだらうか。

近時横斷的の聯盟と云ふことが、各地で叫ばれるやうになつて來た。其の表面の理由は縦的の系統に、横的の結合を必要とする地方的活動を完全ならしむと云ふのであるが、然し此の思想を深く考へたならば、其所に信徒を中心とする要求の存在するのを見出される。

私は本部乃至教廳が、政府化する程斯うした要求が、次第に濃厚になつて本部對信徒の二つの中心が出來て、それが互ひに相補けて、本教は圓滿なる發達をするものと思ふ。唯兩者が互ひに寛容なる態度をもつて、相容るゝか如何かと云ふことが、今後の問題であると思ふ。

枝先教會の完備

去る六月の頃から、東京支廳の主事に、管内教會を巡教せしめたのが、最近終了したので、大體の報告を聞いた所が、随分驚かされる様な事實がある。想ふに斯うした教會は、獨り東京支廳の管内のみではなく、何れの支廳に於いても多少はあるに相違ない。所で小さな事や一時的なことは、又何とか方法が付くであらうが、其の中で最も私しの遺憾に思つたことは、多くの教會が殆んど教會としての、體裁を備へて居ないと云ふことである。

是れは四十年祭前に、何れも争つて教會を設置したのも一つの理由であらうし、又其の教會が借地借家であると云ふことも一つの理由であらう。それは致

方が無いとしても、明治時代に設置せられた教會に、却つて斯う云ふ教會が少なくないと云ふのは一體何を意味してゐるのであらうか。然しそれは兎に角として、教會が其の體面を維持されないと云ふのは、本教として一考すべき問題ではなからうか。

何故なら若し斯うした教會が増加したならば、如何に本教の教理が尊いもので、本部が立派であつても、地方的には教勢を發展せしむることが困難となるからである。或る人は斯うした教會の存在は、本教の發展を示すものではなく却つて本教の發展を邪魔するものであると云つたが、言葉は甚だ極端ではあるが。左様も云へば云へないことも無からうと思ふ。

本教は今や轉機の句として、内容充實が叫ばれてゐる。此の趣旨から云へば形式である體裁の如きは顧る必要もない様ではあるが、事實地方を巡教して

教會の狀態を見たならば、今少し何んとかしたならばと云ふ感を深うせられるであらうと思ふ。

私は此の四五年間、本部に居て四十年祭に没頭してゐたので、部下先々の狀態を知ることが出来なかつたが、今回主事の巡教から、深く注意して見ると何は於いても此の點を改めて行かなければ、本教の發展が遅れる様に思はれるのである。

闇黒の道へ

教祖の道は明るい道である。前も後も右も左も、太陽に照らし出された大地の様に見ても見分けらるゝ、危険のない道である。若し人間が此の道に安

住して居つたならば、其の人の一生は確かに平安なものである。是れが幸福と云ふならば、是れ以上の幸福は人生に無からう。

私は決して明るい道を、通りたくないと思ふのではない。けれども若い人々にとつて、あまりに平坦なる道は退屈ではなからうか。明けても暮れても同じ様な道を歩るいてゐるのは、旅人には堪えられぬことではないか。のみならず退屈した心からは如何しても生々とした心は生れて來ない。昔の殿上人の様な生温い心持しか出て來ない。是れで何んの精神的な楽しみがあらうか。官能の刺戟を求めに至るのは無理もないことである。

是れに反して闇黒の道に進むと云ふことは、或る意味から云へば全く冒険である。前途に何があるやら分らぬ中を、突進して行くのであるから、時に身を轉ばす事もあるれば、道なき所に迷ひ入ることもあるかも知れない。けれども其

の闇黒の中を、信仰の灯火を掲げて通りぬけて行く所に、精神的の悦があるのではないか。

闇黒の道を通りぬけて、明るい道に出られた方々に對して、私は再び闇黒の道に進まれることを望みはせぬ。初めから明るい道のみを知つて、闇黒の道を知らぬ若い人々には、大いに發奮して此の闇黒の道に飛び込まねば、信仰の價値も分らねば、明るい道の有難味も分るまいと思ふ。親の御蔭も結構である。家の徳も結構である。然し自分の體驗に依つて培はれた信仰の、輝く玉を胸に藏してゐることは、更らに結構なことではないか。私しは敢て青年が闇黒の世界に飛び込む勇氣を望むのである。

乗馬と揮毫

今年の暑中休暇は青年會の巡教もなし、別段用事も無かつたので、管長様から頂戴した馬に乗ると、泉州尾崎へ海水浴に行つて、始めかけた揮毫とで暑い夏を送つてしまつた。

馬に乗る方は、あまり熱心でないからでもあらうが、未だに獨りでは充分に行かない。甚だ我儘な馬の性質であるのにも依らうが、時には全く動いてくれない時がある。其處へ行くと字を書く方は、馬の様に生物でないから、思ふ通りに筆が動く筈であるが、さて實際になつて見ると、それが中々思ふ通りに動かない。それで乗馬も揮毫も自分ながら物足らぬこと甚だしい。然し殆んど無

關係の様に思へる、乗馬と揮毫にも精神的には深い一致點のあるのを知つた。筆を執つて紙に向つた瞬間の心持を失はずに、書き了へた時には下手は下手ながら字が整つてゐるが、其の間にふと心を轉じたり、何か思つたりすると、其の感じが直ちに文字に現れて来る。それと同じ様に、馬に乗る場合でも、乗る瞬間の心持に依つて、馬の動作が非常に變つて來ること、又乗つてゐる間にも、心の變化に依つて馬が走つたり飛んだりするものであるのを知つて、私は乗馬も揮毫も、精神的のものであると思つてゐる。

何れにしても字を書くとか、馬に乗るとか云へるのは、四五年も先のことであらうが、兎に角斯うしたのも、先づ其の心を練ると云ふことが、何よりも大事なことである。教會を取扱つて行く場合も、私は是れと同じではないかと思ふ、擔任者の心持や行爲が、知らず／＼の間に、信徒や役員に影響して、自

分の望んでゐること、時に反對の結果を現はすのではなからうか。

言葉と文字

言葉から受ける感銘と、文字から受ける印象とは、實際に非常な相違がある。理屈から云へば言葉が文字に寫されてあるのだから、同一のものであるべき筈だが、事實は全く異なつたる感念を與へる。文字と言葉が其處に各自獨特の長所を持つてゐると云はねばならぬ。

然し何れかと云へば、文字よりも言葉の方が、實感的でもあれば感情的でもある。純理性の上に立つた學者の講演を聞いても、其の人の性格が知らず／＼の間に、聲調や眼光の變化によつて、聽者の心を動かして行くが、其の力が文

字になれば比較的少ない。何故なら無論文字を通じて、其の人の性格は現れて来るが、然しそれを感知するのは、相當讀者に力がなければ理解出来ないから文字では其の人の意志や情操を知り難い。それだけ實感的でもなければ感情的でもないと言ひ得られる。

然し是れは普通の文字として見た場合であつて、文字が藝術化された場合には、其の反對に言葉よりも、文字の方が實感的であり情熱的にもなるのである普通の談話に使用せられる言葉などでは、到底云ひ現はせない微妙な意味が、文字に依つて表現せられるのである。

本教には未だ生々しい情感に依つて描かれた、藝術がないから、言葉を通じてなれば、道の眞味を感じ得られれないと思はれているが、是れは全く誤まつたる觀方であつて、將來は必ず此の考へは一掃せられる日があらうと思

ふ。

此の意味から私しは、本教にもつと深刻な情熱的なものが、講話としても藝術としても生れて来ることを望んでいるのである。何人が其の先導に立つか、其の勇ましき姿を私しは恒に想像している。

秋の夜

静かな夜に獨り深い物思ひに耽つていると、時には惱ましい餘り、堪えられなくなる場合もあるが、時には心が清々して氣が澄渡るので、聯想の絲をたぐつて我れ知らず、ちつと瞑想を追ふことがある。

秋の夜の冴え渡つた月を、窓越しにながめていると、殊に様々なることが思

はれる。自分の越し方など巻物を展げる様に去來して、遣る瀬ない氣持にもなる。秋は人に物思はずと云ふが、洵に其の通りである。心氣が澄めば澄むだけ、物事に感ずるのが鋭くなるであらう。

私しも今更ら改めて、人生問題を考へやうなど、は思つてみたこともない。唯神様の言葉に従つて通れば、それで自分の一生は終るのだと、單純に信じて來たので、今後も此の心に變りがあらうとも思へぬ。けれども夜半獨り座して靜かな雨の音を聞く時などは、我が身我が心を顧みて、轉た心の痛むのを覺えることがある。

斯うして暮すのが又と得難き我が一生の最も正しき道であらうか。自分の生れたのは斯うした暮し方をする爲めであらうか。もつと自分として此の世でせなければならぬ仕事があるのではなからうか。斯うした思ひが次から次へと現

れて來るのを、凝視していると何とも云へない、焦慮に似た氣分になるのである。

人間の思案は皆間違つてゐる。成程神様から御覽になれば其の通りであらう何事も見ず聞かず言はず、そして思ひが無かつたならば、幸福であるかも知れない。けれども我々の心には左様なれない種子を、あまり多く持ち過ぎている。やはり靜かな夜には知らぬ間に物思ひに沈んでゐる。實に秋の夜は心を思ひに誘ふ時である。

誤れる因縁の自覺

因縁を自覺すると云ふことは、やがて其の因縁を切らうとする心を起さしむ

るものであるから、誰れしも一度は其の心境を味ふのも宜敷いが、然し自己の因縁を本常に自覺することが出来るものであらうか。病氣が續いた、不幸が重なつた、天災に度々出合つた。だから自分は悪因縁であると左様單純に信じてしもうものなれば、因縁の自覺も左程困難なことではない。けれども眞に因縁の自覺をすると云ふのは、左様簡單に分るものではない。

何故なら世界には、全くの善人と云ふ者もなければ、全くの悪人もない筈である。盗人でも我が親や子に對しては、親子の情合を持つていたのであるから盗人は凡て悪人であると、一概に云ふことは出来ない。之れと同じ道理で、善人と云はれている人でも、其の心の内では、どんなことを考へているかも知れない。

斯様な譯で人間には善惡兩面の分子があるのであるから、自分の前生が總て

悪いと速断することも出来なければ、白因縁の者だと自覺することも出来ない筈である。それを何れかの方面に片寄せて自覺したとすれば、それは正しい自覺ではなくて、要するに迷ふた覺りと云はなければならぬ。

間違つていても善因縁だと思ふてゐるものは、それでも悦びがあるが、若し悪因縁と自覺したならば、それに依つて幸ひに因縁を切る爲めに努力すれば好いが、悪因縁だからとやけの心持が出て来たならば、因縁を自覺することに依つて、香しからぬ結果を生ぜぬとも限らぬ。

私しは因縁を自覺することの、眞に容易でないことを以前から思ふていた。近頃になつて更らに一層、誤つたる因縁の自覺の恐るべき結果を見出して、戦慄を禁じ得ないのである。

教會の復興

昨年きんねんの九月ぐわつに教廳けうちやうの職制しやくせいが發表はつぷせられて、私も東京とうきやうへ行くことになつた。其その時とき私の頭あたまに浮うんだ、最も重大ぢゆうだいなる問題もんたいは、帝都ていとに於ける教會けうかいの復興ふくこうであつた。是これが私の當面たうめんの仕事しごとだと心に誓ちかつたのである。

所ところが何分なにぶん其その當時たうじは、四十年ねんさい祭さいが目睫めくせふの間に迫せまつてゐたから、それを云いひ出す機會きくわいが無なかつたので、其その儘ままにして置おいた。それから四十年ねんさい祭さいが濟すむと、管長くわんちやうが東大とうだいに入學にやうがくせられることになり、其その書齋しよさいを建築けんちくせなければならぬ、不意ふいの仕事しごとが出て來たので、又た復興ふくこうの問題もんたいに觸ふれる暇ひまがなかつた。

幸さいひに九月ぐわつ末まつ日じつ迄までに、管長くわんちやうの書齋しよさいも落成らくせいしたので、十月じつ一日いちにちに行おはれた教

友會いうかいの總會そうかいに於おいて、私わたしは教會復興けうかいふくこうの必要ひつようと、それに対たいする私わたしの考かんがへを披露ひろうして、參會さんかいの人々ひとびとに反省はんせいを求めたのである。

震災しんさいと年祭ねんさいとの二つを荷になふて、在京ざいきやうの教師けうしや教會けうかい長ちやうが、如何いかに奮闘ふんとうしたかは、茲こゝに云いふ要ようもないが、然しかかも尙なほ之これに加くはへて、今後こんご復興ふくこうの一路いちろに進すすまねばならぬ、其その苦衷くちゆうの程ほどは察さつするにあまりある。けれども求めて得たのではなく、神かみより與あたへられたる此この試練しれんに堪たえて行くことは、本教徒ほんけうとの本懐ほんくわいとすべき所ところである。私わたしは東京とうきやうの教徒けうと等らが、四十年ねんさい祭さい後ご安眠あんみんを欲ほつしつゝある、他たの地方ちほうの人々ひとびとに誘惑いゆうわくされず、復興ふくこうに猛進まうしんせらるゝのを心こころから祈いのるものである。

五年ごねん後ご十年ねんご後ご、東京とうきやうは燒原やけはらの中なかより、すばらしい立派りっぺいな都會とくわいを現出げんしゅつするであらう。其その時とき帝都ていとにふさはしい本教ほんけうの教會けうかいが、所々しよしよに建築けんちくせられてあることは誰たれしも望むところである。其その日ひを樂たのしみに、私わたしは帝都ていとの教會復興けうかいふくこうに努力どりきよくした

いと思ふ。

一枚の端書

昨夜大阪から歸つたら、一枚の端書が高野山の某院から來てゐる。妙な所から何事だらうと裏を返して見ると、位牌の中に俗名正兵衛靈として、其の右脇に十一月廿一日拾參回忌としてある。そして左の方に斯うした意味の文言が書かれてある。

それは「聖靈へ不斷の香花燈明は勿論、朝夕怠慢なく御回向致し居り候、今回年回に相當致し候ては、特に御回向相勤め可申候、御參拜無之候とも當院に於て懇ろに御回向相營み申候間御安心被下度先は御報知迄」と云ふの

である。

高野山の某院から斯うした端書が來たのは、今回が始めてでは無いので、父の葬儀が済んで暫くしてから、第一回のが來た様に記憶してゐる。私は多分新聞の死亡廣告でも見て、親切ごかしに勝手にやるのだらうと打ち捨て、置いた所が其の後年忌になると、同じ様な端書が舞ひ込むのである。無論佛教信者でない私には、何日が年忌やら分らう筈がない。それ所が多忙な時には、死んだ者の年祭さへ指折り數へねば分らぬやうに、忘れてゐることが屢々ある。それだのによしそれが僧侶としての職業だとは云へ、誰に頼まれたと云ふ譯ではないのに、年忌に相當すれば通知までして呉れるのを、私は嬉しく思はずには居られない。

見方によればそれは上手なやり方で、人の弱點をうまく捉へるのだと云ふだ

らう。私もそれは商賣の廣告に過ぎないものだと言ふことも分つてゐる。けれどもそれであつてもよろしい。私は斯うした親切を有難く思ふ。

父に多少恩になつたらしい人もゐる。けれども其の人達の誰が父の死んだ日と、其年祭の時を思ひ出して呉れるだらう。死んだ者は損だ。これが今の世の人の心ではないか。左様思ふ時、私は此の一枚の端書を有難くも嬉しくも思ふ。

一つの岐路

私は随分長い間、淋しい道を一人で通つて来た。他人から見れば或は左様見えなかつたかも知れぬが、私は自分の心身が年と共に、堪え難い淋しみの中に、

引き込まれてゆくのを、何ともすることも出来なかつた。

私が茲拾年間、殆んど休む時なく働いたのは、神様の爲めと思ふ心もあつたが、又一面此の淋しさから脱したい、無意識の願からでもあつたやうだ。其の證據には、一つの仕事をなし終へたら、直ぐ私の心に大波の様に、淋しさが押し寄せて来る。そして泣きたいやうな心持に誘はれるのである。

教祖の四十年祭の活動が、激しくなればなつただけ、私の心境は靜かに落ちて行く。斯うした矛盾した心持で、私は四十年祭を迎へ且つ送つたのである。

今年の春頃から、それでも私の心に、新しいものが芽生えて来た。それは何であるか、未だ私自身にも分らない。けれども其の心が私の淋しさを、次第に拂つて呉れるやうな心持がする。私の身に附きまとうてゐる淋しさが、だんだ

ん薄れて行くやうな氣もして、日一日と心持が確かになるのを感じる。

私は昨今此の芽生えた心が、如何育つて行くか見つめてゐるのである。人間として偽らぬ正しい道が、此の心から出て来るのではなからうか。そんなことも思はれるのであるが、然しそれは今暫らく待つてみなければならぬ。

一年後か二年後か、それが相當に生長した時、明らかに凡てのものが分るやうにも思ふ。然しそれは堪え難い苦しみである。淋しさに泣くべきか、苦しみに悶ふべきか、私は今大きな岐路に立つてゐる。左様だ右すべきか左すべきか時にまかすより外はない。

陽氣と瞑想

本教が陽氣な教であることは、本教の凡ての事實に現れてゐることであるから、今更ら説くの要は無論ないが、然し教外者の人々が考へてゐる陽氣とは、其の内容が大變違つてゐる。酒を呑んで楽しんで、唄をうたつて悦こんだりすることは、客觀的に見れば或は陽氣とも云へようが、一步其の主觀に突き込んでみたらば、反對に陰氣な沈んだ心持が、全心を蓋ふてゐる。本教でいふ陽氣は客觀的の意味が無いとは云はぬが、主として其の主觀の陽氣を、陽氣勤めと云はれてゐるのである。

然し此の主觀即ち其の心を、陽氣化すると云ふことは、實際には中々容易

でない。誰しも人生を樂觀したいと、日夜冀ふているのであるが、其の心境に到達する者は甚だ少ないのである。生活が順境にある時は左程でもないが、逆境にある時などは、得て悲觀し易いものである。

故に眞に人生を陽氣化して行くには、強い心の力を養はねばならぬのであつて、心の力は自己を眞面目に内觀することに依つて、始めて得られるのである。是れ沈思が重んぜられ瞑想が尊ばれる所以であつて、教祖が繰返し胸の中より思案せよと、教へられている所である。

本教が陽氣であるのも、そして其の陽氣が嚴肅味を持つてゐるのも、全く教祖が二十餘年の暗がりの道に於いて、深い／＼瞑想をせられていた、其の道程が背景ともなり、味附けられているが爲めである。是れから思へば今の信者が、教へられることのみを望んで、自分思案をする度合が薄い。信仰に力の無いの

も、上皮のみ陽氣であるのも、全く瞑想を忘れ沈思を輕んずるからである。私は敢て本教徒が、今少し胸の中より思案することを欲する。

神靈中心

去る二十七日行はれた、青年會總會に於いて、松村先生が訓話として、神靈中心主義を提唱されたのが、若い人々に少なからぬ衝動を與へたやうである。成る程今日迄婦人會や青年會に於いてせられた、種々の訓話とは多少其の行き方が異なつていたから、新たな興味を以つて迎へられたものとも見られる。然し神靈を中心とする考へは別段新しいものでもなければ、不可思議な考へでもなく、分り過ぎている程分り切つた考へである。

それが耳新しく聞かれたと云ふのは、其所に新しく聞かねばならぬ何物か、あつたに相違ない。それは一體何んであらうか。是れは人々の見方に依つて違ふが、一つは四十年祭迄に説かれた教理が行き詰つたのと、四十年祭後の人心が、何か新しい方面に進む道を求めてゐた。斯うした心持が最も古い神靈中心の思想を、耳新しく聞かした理由ではなからうか。

それと今一つは先生が自ら教義の研究に没頭せられて、始めて叫び出だされた聲であると云ふことも、人々に多少の感動を與へた理由とも見られよう。然し其の所説は要するに、今後は神靈を中心として、新天地を開拓せなければならぬと、極く其の大綱を示されただけであるから、今後此の考へが先生の心に於いて、如何に變化し進展して、其の所説を全ふせられるか、實に興味深き問題である。

思ふに今後若き人々の眼は、此の一點を凝視するであらうが、私は先生が本教末代の爲めに、凡てを赤裸々に披露して、神意の存する所と、事實の間に生ずる矛盾等を教へ、後人をして道に誤まること無きやう、指導せられんことを望むのである。

遊撃の要

野球に遊撃と云ふのがある。定員九名の中八名迄は、一定の地位にあつて、敵の攻撃を防禦するのであるが、遊撃のみは一定の地位がなく、左右前後に活動して、敵を防ぎ味方を守るので、遊撃と呼ばれているのである。私は本教にも斯うした、自由の立場にあつて、本教を擁護し、本教の布教を容易ならし

める、個人乃至團體の必要を、痛切に感じつゝあるのである。

何故なら本教は現在、凡てが組織的になつてゐるから、主張すべきことがあつても、又行はねばならぬことがあつても、一定の地位にある者ばかりであるから、累を本教に及ぼすことを恐れて、當然のことであつても、口にも筆にも行ひにも現はすことが出来ない場合が往々ある。是れが爲めに本教の發展がどれだけ遅れてゐるかも知れない。故に本教を離れた立場にあつて、本教徒の言はんとする所、行はんとする所を語り行ふ機關のあることは、決して無意義ではなからうと思ふ。

然し私しは利慾の爲めや、本教を利用するが如き心情より出でたるものは、絶體に欲せないのである。唯神に勤める眞面目な心で、眞に本教の發展を冀ふ外、何等不純の影なきものを望むのである。生活に困るから、自己の名を現は

したいからと云ふやうな、埃な心からする者が過去に随分あつたから、本教では教外にあつて働く人を、あまりに好まぬのであるが、然し今後生活の道を自ら講じつゝ、互ひに相集つて本教の蔭から、大きい働きをする者が、現れることは決して拒むべきではない。むしろ私しはそれが眞面目な動機と、公明なる行爲の上に立つてゐる以上は、是れを正しく理解し育て、行くことが、最も必要であるやうに思ふ。

信徒に親しめ

部下先々の教會に於いては、其の相手が信徒であるから、信徒に親しむなどは問題でないけれども、分教會以上の教會になると、教師や教會を相手として

いるので、自然信徒に接する機会が少なくなり、遂には信徒の心持などは、理解出来なくなる様である。是れは實際其の局にある者としては止むを得ない事情からでもあるが、本教の大局から見れば、甚だ好もしくらぬ傾向である。

殊に四十年祭の聲がかつてからは、教會の増設や、教師の養成や、祭典の準備等に忙殺されて、何れの教會に於ても、心を落ち付けて信徒に接している暇もなかつたやうな有様で、信徒との間に少なからぬ隔たりが生じて來たやうである。そして宣教所から次第に上級教會に至る程、其の隔りが大きい。心を結び合ひ、心を繋ぎ合ふて行かねばならぬ道として、是れは考へなければならぬ點ではなからうか。

それで私は四十年祭も済み、其の後始末も大體終つた今日としては、何よりも先づ信徒の人々に、直接會ひもすれば話しもして、親しくして行くことが

何よりも急務と心得るのである。官吏か行政官の様な心持で、部下の人々に接するのは、決して宗教に身を置く者の採るべき道ではない。然しそれも忙しい時ならば、人も許せば神も許されるであらうが、其の多忙な時が過ぎて、なほ且つ同じ調子で進んでは、必らず間違が生ぜねばならぬ。それで私は本教の凡ての職にある人が、地位や威信など、云ふやうな、人間的な衣を脱ぎ捨てて親が子に接するやうな、温かい心をもつて信徒に接することが、神様の道を大ならしむる所以であり、且つ今日は其の時句であると思ふのである。

本誌のやぶにらみ

雑誌と云つても其の目的とする所は、必らずしも同一であるとは云へない。

學術雜誌や、娛樂雜誌のやうなものと、本誌など、は、全然其の狙所が異つて
いる。其所に其の雜誌の特異な使命がある譯である。

然し偏んと云つても、雜誌である以上は、讀者を度外視することは出来ない
筈である。如何に其の雜誌の體裁や、文字の配列が上手に出来てあつても、其
の内容が讀者と無關係であつたならば、折角の苦心も水の泡となつて、失敗に
終らなければならぬ。

由來本誌の讀者は、殆んど固定されているのであるから、何を書いていても
其の數に於いて減じるやうなことは、あまりないのであるから、如何かすると
讀者と離れた方面に、伸びて行くやうになる。現に最近の本誌を手にとつてみ
ると、若し是れが本誌の讀者を考慮に入れなかつたら、立派な雜誌たることは
誰れしも認めねばならぬが、さて讀者の側に立つて考へると、又た云ひ分があ

るのである。

私は最近部下の教會を四五ヶ所まはつた機會に、それとなく本誌に對する
考へを尋ねてみた。すると殆んど口を揃へたやうに、本誌が次第に六ヶ敷なつ
た。自分などが讀んでも分らないから、地場通信だけより讀まない。何んとか
もう少しやさしく書けないものでせうかと云ふのである。

六ヶ敷書くと云ふのは、やさしく書けないからであらうが、又一つには自己
満足の爲めに、讀者を犠牲にして書くからではなからうか。それよりも自己を
犠牲にして、やさしく書くのが、道の本旨ではなからうか。何れにしても近頃
の本誌は、實際やぶにらみが過ぎてゐる。何んとか誰れにも分るやうな雜誌に
して貰ひたいものである。

眠れる力

外語の落成式が済んだので、私に當面しておつた責任が、大體片附いたので私しの心持はすつかり落付いた。秋晴の静かな朝に、窓から差し込む陽の光を浴びて、讀書に親しめるやうになつた。私しの心は内から湧く喜びと、平靜なる環境に感謝している。

何かに目差して大きい力で、ぶつかつて行くことも、人間としては楽しい快いことであるに相違ない。仕事三昧に耽ると云ふが、其の時が人間無上の悦であることは、私しも理解出来ないことはない。けれども又靜かに澄んだ氣分を味ふことも、人生の楽しみの一つである。どちらかと云へば、自分の經驗に依

れば、激しく活らいている時よりも、落付いた氣分を味ふている時の方が、自分が深化され淨められていくのを覺へて、深い楽しみが感ぜられる。

然し斯うした氣分が、私しの心に現れて來たのは、本教全體の上に、同じ氣分が現れて來たからではなからうか。若し左様だとしたならば、本教全體が表面上行き詰つてみへても、其の内部には深い力が現れかけているとも云へる。又實際左様なれば四五年後に、新しい力が芽出へて來る譯はないのであるから、理として深い力がひそんでゐると見なければならぬ。

唯其の強い力と云ふべきか、深い樂し味と云ふべきか、それを早やく自覺する人があつたならば、其の人が幸福であるのみならず、多くの人の爲めになると思ふ。けれどもそれを知らずに過せば、本教の行詰りが、やがて自分の行詰りとなつて、苦境に陥らぬとも限らぬ。

斯うしたことが、自分の心が平靜になると共に、胸にふと浮んで来たのである。私はもつとく深い所に心を注がねばならぬ。

外國の小説を讀め

私は最近讀書に親しまなければならぬと思つて、印度語から譯された『ゴラ』と云ふ小説を、圖書館から借りて來て讀んでしまつた。讀了後心に深く考へさせられたこと、海外布教の困難と云ふことである。

小説の大體の筋は、梵教會に屬してゐる家庭の少女と、印度教に屬してゐる青年とが戀に落ちて、種々なる迫害の下に結婚すると云ふのであるが、此の筋の背景として、印度の社會相が遺憾なく描かれてゐる。結婚の自由と宗教的戒

律との間にさへ是れだけの葛藤が生じるとすれば、新しい宗教を此の國人に植付けるのは、如何に困難なことであらう。

著者タゴールは書中に印度に關して『神様はこの國を世界中一番優れた國にして、その目的を達しようとして、幾千年も幾千年も御目を懸けられたのです』と、スチヨリタと云ふ處女をして言はしめてゐる。此の言葉は如何に印度の國人が其の郷土に對する熱烈な信仰を持つてゐるかを、物語つてゐるものである。

民族的な深い根差しのある、種々なる信仰に打ちかつて、本教が海外へ伸びて行くのは、全く底の知れない海へ飛び込むのも同じである。餘程の勇氣と強い信仰が無ければ、其の成績を見出すのに困難であらう。

朝鮮や滿洲は日本の支配下にあるだけ、幾分容易であらうが、それでも其の習慣や人情を無視して、充分の布教は困難であるに相違ない。それで私は『ゴ

「ラ」と云ふ小説を読んで、今後は先づ東洋各國の文學を、海外布教の志ある者に讀ませて置くことが、單語などを憶へさせるよりも、重要な課目であると思ひ至つたのである。

教校生の信仰

今日になつてから斯うしたことを云ひ出すのは、私しの最も心苦しいとする所であるが、あまりに驚かされたので、敢て云ふてみる氣になつたのである。今月二回私は教校生二三十名と、座談會を開いて親しく會つてみたのである。教校在職當時は、成る可く教校生に會はぬようにしてゐたのと、四十年祭で忙しかつたので、斯うした機會も無かつたのであるが、今度はそれが出來た

ので、私しとしては少なからぬ期待を持つてゐたのである。

所が實際に會つてみると、私しの期待は殆んど裏切られてしまつて、確かな信仰を持つてゐる者は極少ない。卒業後の方針などに付いても、確實に定めてゐる者は數へる程である。是れをみて始めて私しの長い疑問が解決された。

何れの教會も同じであらうが、教校の卒業生が道の上で働いてゐるのは一刻にも足らない。これが全部道の爲めに活動したら、恐らく本教の勢力は、再び倍加するであらう。けれども國へ歸つてからは、お道を見向もせない連中さへある。

嘗て私は教校生が急激に増加した時、眞面目に教師を養成するには、三十人に一人の教師を入れなければ、充分の仕込は出來ない。従つて現在の状態で、卒業者に對する責任を持つことが出來ないと、當時の教學部に申し出した

ことがあつた。

爾來敎校は生徒が増加しても、教師の數は割合にふえない。従つて生徒に對する敎養が、深く徹底して行かないのは止むを得ない。是れは講師の罪でなく、學校の組織の缺陷である。同じことならば國へ歸つても、充分布敎の出來る、熱心と信念のある人を育て上げるやうな組織が、何かの形式に依つて生れんことを私は望むのである。

法城を護る人々

其の書名と著者に興味を引かれて、同書の上巻を讀んだのは昨年春頃であつた。佛敎の弱點や、傳統的習慣に對して遺憾なく攻撃する、青年宮城に關

する興味が、深く胸に喰ひ入つてゐたので、最近中巻と下巻を、隨分丹念に讀んだのである。

私は此の書を讀んで、啓發する所が隨分あつた。是れは著者に對して感謝の意を呈して置く。殊に佛敎の現在に對する知識を、豊富にせられたことも、私しの僞らぬ告白である。然し作中の主人役たる、宮城の採つた態度に付いては、全然反對の考へを持つてゐる。

法城を護る人々を痛快に攻撃するのは宜敷い。又革命的な思想に共鳴してゐるも悪くはない。本山の大法要や宗敎懇談會の裏面を、手痛く非難するのも妙である。最後に友人をして父の寺を焼かしたのも勢ひ止むを得なかつたとも云ひ得よう。

然し私の最も遺憾とする所は、過失であつたとは云へ、寺と共に一人の妹を

殺し、長き親子の争闘に父が疲れて、戦ふ勇氣を失つたのを、自己の勝利として誇れる態度である。著者は其の點に、種々な理由を列べるであらう。けれども私しは斷じて與することは出来ない。

尙ほ此の大量の小説が、藝術としてどれだけの價值があるか、甚だ疑はしいのであるが、兎に角佛教の或一面の運動を、忌憚なく描かれたる記録として、本教徒の一讀すべき價値はある。否是れを讀むことに依つて、若き人々が如何なる境遇から、如何なる思想を生み出だすかと云ふことを、眞實に理解して置くことは、本教の將來を護る人々の、重要事の一つであらう。

二つの流れ

教祖が自ら踏んで示された、五十年の尊き雛型の道を、如實に慕ふて進まんとする純信仰な心持に依つて、本教を人の胸から胸へ押し擴めて行かうとする第一義的な考への上に立つ者と、本教も現在では立派な教團になつたのだから社會事業も起さねばならぬ、文書傳道もやるべし、海外布教の方針も樹立せよ是れ等種々な問題が、教團意識の上に組立てられ、それが漸次是認せられる傾向である。

此の二つの流れ、即ち教會信仰と教團意識とが、目下本教には交流してゐるのであるが、未だ其の間に何等の衝突もなく、至極順調に進んではゐるが、最

近に至つて多少其の間隔が廣くなつて來たので、其の片鱗が確然と現れて來た。其の一つは神靈中心の信仰であつて、今一つは海外布教の問題是れである。神靈中心の信仰は、四十年祭後力説せられてゐる、内容充實を實現する、必然的な要求から生れて來たもので、云ひ換へれば教會の内容を充實せしめるには、神の守護と導きに據らねばならぬのであるから、神靈を心の對象として、日夜自己を反省すると共に、靈救の豊かに下らんことを乞ひ望むは、當然のことである。

此の信仰の生活に比して、教團意識に生きるのは、實際に於て容易であるばかりでなく、仕事に對する興味もあるもので、人間苦を深刻に經驗せぬ者は、此の方面に新天地を開拓せんとして、最後に海外布教の大旗を掲ぐるに至つたので、是れ亦時代の要求でもあれば、教團意識の要求である。

然し此の二つの流れが、今後如何に消長するか、或は本教の將來を、其の消長に依つて卜せらるゝかも知れぬ、何れにしても私には大きい興味ある問題である。

歳 末

今年も亦暮て行く、今年再び歸らない。斯う思ふと何んとなく物寂しい。世間が歳末で忙しくなればなる程、寂しい落付いた心持になる。そして世間の人が忙しがるのが、不思議な様な笑ひたい様な氣にもなる。

今夜も近所に棟上げがあるとみえ、今は夜の九時だと云ふのに、酒に酔つた連中が、近所の迷惑も顧みず、大聲で俗歌を唄つてゐる。あの連中は何が面白

いのだらう。人生の寂し味を感じないのだらうか。何故静かに生を味はないの
だらう。そんなこと迄思ひやられる。

然し是れは人事ではない。私し自身が、今年一年に通つた跡を追想してみる
と、我れながらつまらない心持がする。何一つ是れと纏まつた事も出来ず、と
云つて深い思索に耽つたと云ふでなし、淡い夢のやうに過してしまつた。もし
て私しは又一つの年を重ねるのである。

新年を迎へると思へば、理屈では何とでも云ふが、やはり子供の時に似た、
明るい感じがせぬでもない、夏の好きな私には、春の光りに浴すと堪らない感
じがする。其の時が近寄るのだと思ふと、遠くで私待たれてゐるやうな氣も
する。かうした意味で私は新年を迎へるのを、心から樂しむのである。

然し新年を迎へると同時に、一つ年を取つたと云ふことに、口惜しいやうな

力の抜ける様な、物足りない感じが起るのである。それはあまりに自分の、無
能な不甲斐なさを見せ付けられるやうに思ふからである。三十六にも七にもな
つてゐながら、一體何をしたのだ、起きて食つて寝るより外に何も出来ないぢ
やないかと、笑はれてゐるやうな氣がして、外へ出るのさへ嫌になる。だから
歳末を静かに味つてゐる方が、私の氣持にびつたり合ふのであらう。

最後の願

番茶の夜を書き始めた時は、あまり肩の凝る様な、六ヶ敷いことばかり列べ
てゐては、讀む人も面白くなからうから、少し碎けた罪にならぬものを書いて
自分の氣分も變へやうと思ふてゐたのである。所が實際に當つてみると、左様

ばかりも行かなくなつて、問題を引き出したたり、悪口を叩いたり、餘計なことを書いてみたり、其の時々、其の気分に応じて、勝手なことを書き並べ、今更ら汗顔の至りに堪えない不始末を演じた譯である。

然し私は番茶の夜の名に相應しい、問題を捕へることは出来なかつたかも知らぬが、是れに依つて私の興味が、現在如何なる方面に、其の中心點を置いてゐるかは、充分知つて頂けると思ふ。或は皮肉な觀方をして、表現は心の反對だと云ふ論法で、逆に見られる方が無いとも云へぬが、それでも一向に差支はない。何れにしても番茶の夜は、最近の私を語るものである。

短評もあれば感想もある、斯うした形式の表現が、今後本教の雜誌にも掲げられるのであらう。私はそれを希望する。何故なら信仰の表現は、決して概念化したものではなく、體驗を如實に示すものでなければ、其の効果が少ないからである。

近時本教の教理に對する態度は、あまりに理論化せられんとする傾向が、著るしく現れて來てゐる、是れも止むを得ない要求からであらうが、同時に心情を寫し出すものとして、あまり頭のみならず、柔らかなものも必要である、私の番茶の夜は此の意味に於て失敗であるが、後人が私の缺點を補ふやうな、ふつくりしたものを書いて、讀者を樂しませて下さることを祈つて、茲に番茶の夜を擱筆することにする。

昭和二年一月十五日印刷
昭和二年一月廿五日發行

奈良縣山邊郡丹波市町三島

著作兼 發行者 增野道興

奈良縣山邊郡丹波市町川原城

印刷所 天理教々廳印刷所

右代表者 辻 豊彦

312

83

終

